変わる学校スポーツ

少子化が進み、子どもたちを取り巻くスポーツ環境が変化してきている。スポーツ庁からも「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が発表され、改革が動き出している。学校におけるスポーツの在り方が、持続可能で、より現状にマッチしたものとなるような試みの一つとして、今回は運動部活動をスポーツ少年団がサポートしている仙台市立大沢中学校（宮城県）の実例を紹介する。

イラスト／庄司 猛

連載〈第5回〉

中学校部活動とスポーツ少年団が一体となって子どもたちを育てる

仙台市立大沢中学校×大沢ベースボールクラブスポーツ少年団

宮城県では中学生団員によるスポーツ少年団活動が活発に行われている。今回訪れた大沢ベースボールクラブ（大沢BC）もその一つ。特徴的なのは仙台市立大沢中学校の野球部と密接に連携して運営している点だ。代表の松原三郎氏は「ここでは、顧問の先生とわれわれスポーツ少年団の指導者が一緒にグラウンドに立っているのは当たり前の光景です」と状況を説明する。

「ですが、大沢中の野球部に入ったからといって、スポーツ少年団に入団することは一切強制していません。今は1、2年生24人、全員スポーツ少年団にも入っていますが、代によっては部活だけに所属する生徒もいます」。

大沢BCの団員はすべて中学生。というのも大沢中を学区とする二つの小学校に、それぞれスポーツ少年団があり、そこに所属していた野球少年たちが、中学生になったときに、主として大沢BCに入団するからだ。もちろん、県内には一つの単位団に小・中学生が所属するケースもあり、中学生の部のスポーツ少年団交流大会も年に2回開催されている。

大沢BCの設立は2001年。もともと同地区に中学生を対象としたスポーツ少年団があったが、指導者が不在となりチームも消滅してしまった。当時の大沢中の野球部の顧問が野球未経験だったこともあり、選手の保護者たちから、再度スポーツ少年団を立ち上げ、指導をしてほしいと松原氏が依頼を受けたことが始まり。松原氏は名門と知られる仙台商業高等学校で選手として活躍、その後同校の監督を務めた指導者だったからだ。以来、土・日曜を中心に地域に根ざしたスポーツ少年団として活動を続けてきており、現在では卒業生の父親などもコーチングスタッフに加わっている。

スポーツ少年団「中学校の部」が当たり前

子どもたちを中心とした学校、地域、保護者の連携

「学校と地域の大人たちと保護者で子どもたちの健やかな成長を支えていきたい」というのが創設当初からの松原氏の考え。「合言葉を『アワー・サンズ（our sons＝私たちの子どもたち）』としています。保護者には『マイ・サン（my son＝私の子ども）』にならないようにと言っています。地域の大人、教師、保護者が連携して、みんなの子どもたちを見守っていくのです」。

とはいえ、こうした構図が出来上がるのは簡単ではなく、「子どもたちを中心にした、それぞれの立ち位置が大切」と語る。難しいのは、学校の校長、顧問、保護者は数年単位で入れ替わっていくこと。そうしたなかで「地域の大人たちは、ずっとここにいるわけですが、だからといって学校の部活動の手助けをしているという立ち位置を逸脱しないようにと心しています。学校側にもわれわれに丸投げにならないようにとお願いをしています。保護者たちも『アワー・サンズ』の気持ちで見守りつつ、出しゃばりすぎないといった、それぞれの立ち位置と歩み寄りが必要です。あくまでも中心にいるのは子どもたち。子どもたちにとって、何が大切か、何が必要か。その共通認識を持てるようにコミュニケーションには力を入れています」。

大沢ベースボールクラブスポーツ少年団としても活動する大沢中野球部の皆さん

年2回行っている大沢中学校区の二つの小学校との3校合同練習会

ずっとそこにいる地域の大人、スポーツ少年団の指導者からまず歩み寄り、コミュニケーションを取るように心がけている。だからこそ学校との良好な関係が築いていけるのだろう。大沢中野球部で顧問を務める堀江洋介教諭はスポーツ少年団との連携で負担も軽減していると語る。

「野球は小・中と経験があるのですが、松原さんほど専門的に指導はできませんから、とても勉強になっています。また、土曜日に練習に参加したら、日曜日は出ませんし、練習試合などの引率なども、スポーツ少年団として動いてくれ、保護者の協力も得られるので、ほかの部活動の先生たちから比べると、ずいぶんと助かっています」

室内で映像を見ながらスイングのチェック

ともにグラウンドに立ち指導に当たる松原三郎代表（右）と堀江洋介教諭

学校の活動を理解し良好な連携を築く

そんな大沢中の事例は、堀江教諭からしても「とてもうまくいっている例」だという。「学校行事などスケジュールも配慮し、定期試験などで学校として部活動休止としている期間は、スポーツ少年団も練習を休みにするなど、学校側と歩調を合わせてくれています」と学校の活動を理解していることがうかがえる。

「運動部活動の在り方に関する総合的なガイドライン」が出される前から、中学校とスポーツ少年団が連携してきたわけだが、現在気にかかっているのは活動時間。大沢BCとしての活動は土・日曜が基本、平日は大沢中の部活動とはいえ、連携が取れている分「すみ分けはあいまいです」と松原氏。「平日は仕事がありますから、われわれが指導し、スポーツ少年団として活動しているのは週末だけです。ただ、部活動と連携していることで、その一環と考えれば、活動が多すぎるということになってしまいます。そうしたことも、学校長とは話し合いを持っていますし、これからも相談しながら活動していきたいと思っています」。

また、堀江教諭は「これまで週末には午前・午後とダブルヘッダーで行っていた練習試合が午前だけになるなど、現場の環境は少しずつ変わってきていると思います。一方で、平日の部活動では実際それほど活動できないのも現状です。2時間できないことのほうが多いですね」と現状を説明する。

今回の大沢中と大沢BCの連携がうまくいっている大きな要因として、宮城県において、すでにスポーツ少年団「中学の部」が確立されているといった環境が挙げられる。一方で、部活動とスポーツ少年団（総合型地域スポーツクラブも同様）の連携といったモデルは、活動時間が増える可能性が高いといった課題も見え隠れする。それでも、学校、地域、保護者の良好な連携が、子どもたちのスポーツ環境を支えていくということに間違いはないようだ。SJ

※公益財団法人日本スポーツ協会発行『Sport Japan』41号より抜粋。『Sport Japan』の詳細はこちら→http://www.japan-sports.or.jp/publish/tabid852.html